ピアノ演奏への関心に関する調査研究
―クラシック音楽への関心とピアノ演奏への関心の齟齬について―

大　庭　美　奈

Investigation of Consciousness for Playing Piano

Mina Ohba

（2017年11月22日受理）

Ⅰ．はじめに

クラシック音楽は、ここ最近の音楽市場において継続的な一定水準の売り上げを記録している。音楽市場自体は、2000年前後よりi-pod等のポータブルミュージックプレイヤーの普及に伴い、音楽への人々の触れ方が変質することとなった。さらにその後、スマートフォンが我々の生活に急速に浸透した結果、音楽はもはや必ずしもCDを1枚購入するものではなく、単純に欲しい曲、聴きたい曲だけをダウンロードして聴きたい場所で、聴きたいときに聴くというものが主流になっているといえる。そのような昨今の音楽への触れ方の変質は賛否両論あるが、音楽市場の動向に関していえば90年代と比較すると明らかな市場縮小は否定できないが、2004年以降の売上自体は増加傾向にある。よって、若者を中心とした音楽への触れ方の変化が、音楽市場に対して必ずしもネガティブに作用しているわけではないと考えられる。その中でも、クラシック音楽の市場は、約300億円を超えるという。この数字はジャズの10倍以上であり、いかにクラシック音楽が音楽市場においては手堅いビジネスを構築しているかが分かる。さらに、コンサートに関しても堅調な動員を長期的に維持している様である。手軽に触れる音楽が望まれる中でも、あえてコンサートホールに足をのばして生の演奏に触れる習慣は、多くの人にとって失われつつある文化ではないといえる。

では、その一方でピアノ人口に関してはどうだろうか。ピアノの普及は昭和30年代後半から昭和40年代前半が全盛期で、昨今はピアノの販売台数やピアノ教育受講者数も芳しい傾向にない様子である。[1] クラシック音楽は、音楽市場では追い風すら吹いている状況にあって、この傾向の違いは一体何に起因するのであろうか。直接的な要因として、そもそも習い事をしている小学生の割合が低下傾向にあることが考えられるが、それに加えて、ピアノ学習に対する保護者の意識として小学校低学年までにピアノに継続的に触れさせる機会が得られなければ、習い事としてピアノを選択するべきではないと考える風潮が強いという報告もある。[2] また、家庭において子どもがよく聴く音楽ジャンルとしては、アニメソングや童謡であり、保護者は主にJ-POPを好んで聴いていることが報告されている。[3] よって、現在の趣味趣向が多様化している状況では、クラシック音楽は確かに嗜好品としては確固たる地位を確保できているが、習い事の対象としてはクラシック音楽を演奏することは安定したポジションを失いつつあるといえる。特にピアノの場合は、幼少期という短く、限られた時間を逃せば、演奏したいという欲求すら引き出すことが困難となることが多いことが分かる。ピアノ演奏というものは、格式が高いものであり、形式に縛られたクラシック音楽を演奏するものだという先入観が人々の意識に深く根付いていることが、ピアノを取り巻く状況を不利にしていることも考えられる。近年、アウトリーチ活動として、子ども向けのコンサートや参加型イベントが数多く企画されており、音楽に子どもたちが触れる機会自体は多用化しており、一定レベルの成果はあがっている様子であるが、保護者や子どものニーズにどの程度合致しているかは詳細な研究報告も少なく、不透明な面も多い。そのため、習い事をする子どもやその内容を検討する保護者は、どのようなジャンル、曲目がピアノ演奏への関心を誘発するのか検索したいと筆者は考えた。筆者は、ここ数年ホテルのロビーコンサートを通して、親子連れを聴衆とし

別刷請求先：大庭美奈，中村学園大学教育学部，〒814-0198　福岡市城南区別府5-7-1
E-mail：mina@nakamura-u.ac.jp

[1] 木村貴紀　2007年　『近年のピアノ教育展望』　共栄学園短期大学研究紀要　23号　p.91
[2] 末永雅子　2009年『ピアノ学習への課題－調査に現れた保護者の意識と役割』　広島文化短期大学紀要　41号　p.123
[3] ヤマハ音楽研究所　調査レポート　2013年　『現代における子どもと音楽とのかかわり』－４，５歳児の保護者へのアンケート調査結果から－　p.16

た演奏をする機会に恵まれた。そこで、今回ホテルロビーコンサートに際して、聴衆を対象にアンケート調査を行い、ピアノ演奏への啓蒙において重要な意味を持つ因子を探索することを目的とした調査研究を行うこととした。なお、本研究は今後複数年にわたり継続し、有意差検定が可能な十分なサンプル数を獲得した後に最終的な考察を行う予定だが、本稿ではまず第一報として単年の研究成果を報告したい。

Ⅱ．方　　法

1．調査対象と調査時期

調査を実践した場所は、長崎県佐世保市にある、「ホテル日航ハウステンボス」とした。ハウステンボスは、近年九州を代表とするプレイスポットであり、九州圏内は無論のこと、遠方からも多くの人が訪れ、関連の宿泊施設も非常に人気が高いため、アンケート調査の場として適している。また、筆者はここ数年例年行事の様に演奏の機会に恵まれているため、運営スタッフの理解と協力を得られやすいと考えたため、調査の場所に選定した。ホテル側には、責任者も含め事前に研究内容を伝達し、十分な理解が得られ、調査が認証されたため、実践することとした。ホテルロビーにて演奏を行い、事前にアンケート用紙を聴衆に向け配布し、演奏終了後に回収した。回収の際は、アンケートの返答内容を確認しないように留意し、筆者が演奏中に立ち寄った人には現場スタッフに用紙を配布してもらう等、可及的に多くの回答を得られるように注力した。

調査時期としては、平成27年12月14日11時00分より開始とした。調査日は、日曜日であり、クリスマスも近づいた師走の時期であるため、家族連れを含む、多くの集客や偶然立ち寄る人が期待できるため、ホテルスタッフと検討を重ね時期を決定した。

2．演奏環境

コンサートを実践するにあたり、留意した点は以下の通りである。

①ピアノ調律について

会場に備えつけのグランドピアノは、定期的に演奏に用いられてはいなかったため、事前に信頼できる調律師にて調律を依頼するようにホテル側に要請しておいた。当日は、筆者自ら調律を確認し、演奏に支障がないことを再度確認した。

②空間について

どのような催し物があっているのか明確にするために、大型のポスターを掲示した。ポスターには、プロフィール、演奏曲目、また実施時の季節や曲目などのその時々に合わせたイラストデータを作って頂き、それを掲示した。実際に使用した資料を図１に示す。

図１　演奏会場にて使用したポスター

3．演奏曲目

選曲については、限られた時間の中でいかにピアノそのものの魅力を伝えられるか、親しみやすいプログラムをどのように組むかを考慮した。

コマーシャルで使用されるような聞き馴染みのあるクラシック音楽を選出するとともにポップソングも取り入れる等、クラシックに深い素養のない人でも気軽に聴ける雰囲気を重視した。最終的に決定した曲目は以下の通りである。

表１

１．「アナと雪の女王」よりレット・イット・ゴー～ありのままで～
２．ドビュッシー作曲　亜麻色の髪の乙女
３．ドビュッシー作曲　アラベスク第１番
４．ドビュッシー作曲　「映像第２集」より　３．金色の魚
５．クリスマス・パーティー・メドレー

上記の曲目を選定した理由は、次の通りである。

まず、１．「アナと雪の女王」よりレット・イット・ゴー～ありのままで～は、ロビーコンサートを開いた当時、映画「アナと雪の女王」がヒットし、子どもたちがところ構わず劇中歌を口ずさんでいたため、子どもたちの興味・関心を引き出し、心を掴むために演奏すべきだと感じた。また、ロビーコンサートであるため、最初に演奏した方が子どもたちもより集まってくるのではないかと感じ、１曲目に持ってきた。

２．ドビュッシー作曲　亜麻色の髪の乙女、３．ドビュッシー作曲　アラベスク第１番は、コマーシャルでも流れている聞き馴染みのある曲であると共に、比較的聴きやすく、ヒーリングミュージックとしても有名な曲である。奏者の作る空気感や、ドビュッシー特有の音の煌めきを五感で感じ取ってほしいという願いがあったため、選曲に至った。

そして、４．ドビュッシー作曲 「映像第２集」より３．金色の魚は、難易度が高い曲であり、聴き映えもする楽曲となっている。コンサートに於いて、必ず華やかでありながら聴き映えのする曲を山場として持ってきた方が、聴衆を惹きつけられると感じているため、この楽曲を取り入れた。また、元々ドビュッシーの作品は色彩豊かな作品となっているため、作曲者が表したかった色の持つ響きを味わうことをさせたいと感じたため、敢えてタイトルに色が入った曲を選曲した。

最後に演奏した５．クリスマス・パーティー・メドレーは、クリスマスの心躍る季節感を音楽で感じ取られ、クリスマスの楽曲も様々なものがあることを知ってほしいという願いからメドレーで演奏を行った。メドレーは順に、サンタが街にやって来る～赤鼻のトナカイ～諸人こぞりて～ひいらぎ飾ろう～もみの木～ジングル・ベル～ママがサンタにキッスした～ウィ・ウィッシュ・ユー・ア・メリー・クリスマスである。

４．アンケート調査内容

本研究で実際に用いたアンケート内容を以下に示す。

表２

本日は、演奏会にお立ち寄り頂きましてありがとうございます。差し支えなければアンケートにご協力いただければ幸いに存じます。以下の質問に対して当てはまる項目に○を記入して下さい。

１．あなたは、これまでピアノを演奏した経験がありますか？
　はい・いいえ

２．あなたの年齢はどれに当てはまりますか？
　小学生・中学、高校生・20歳以上

３．今回の演奏を聴いて、今後 CD やコンサートでクラシック音楽を聴いてみたいと思いましたか？
　はい・いいえ

４．今回の演奏を聴いてこれからピアノを演奏してみたいと思いましたか？
（１で、「はい」と答えた方は返答いただかなくて結構です）
　はい・いいえ

以上の内容を印記した A4サイズのアンケート用紙を配布した。

Ⅲ．結　　果

当日は会場において27枚の資料を配布し、有効な回答を22枚回収することができた。質問事項１「あなたは、これまでピアノを演奏した経験がありますか？」の結果としては、図２より「はい」と答えたのは５人、「いいえ」と答えたのは17人となった。ピアノ演奏に関しては、未経験者が大多数であることが分かった。以後は、データを「ピアノ経験者群」と「ピアノ未経験者群」の２群に分けて解析することとした。

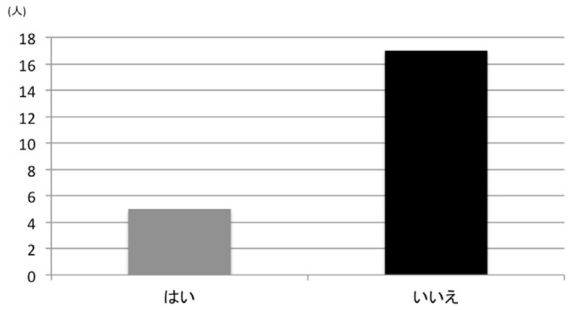

図２「あなたは、これまでピアノを演奏した経験がありますか？」への回答

質問事項２「あなたの年齢はどれに当てはまりますか？」の結果としては図３の通り、ピアノ経験者群では小学生が４人、20歳以上が１人となった。ピアノ未経験者群では小学生が７人、中学・高校生が４人、20歳以上が６人となった。ピアノ経験者群は、母数自体も少なく、年齢層の分布も極端な傾向を示したため、本研究の研究目的の趣旨に沿わないと判断し、以後はデータを割愛することとする。

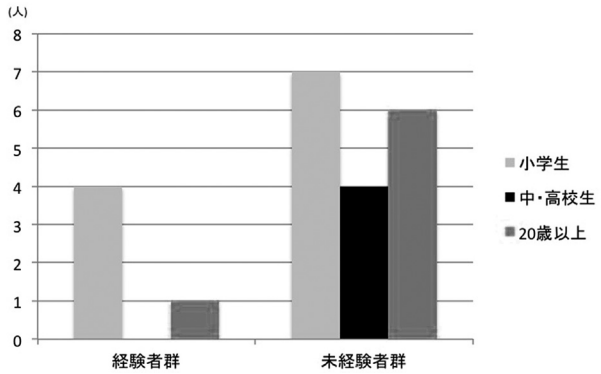

図３「あなたの年齢はどれに当てはまりますか？」への回答

質問事項３「今回の演奏を聴いて、今後 CD やコンサートでクラシック音楽を聴いてみたいと思いましたか？」の結果は図４の通り、小学生は「はい」が６人、「いいえ」が１人となった。中・高校生は「はい」と「いいえ」がともに２人となった。20歳以上では「は

い」が４人、「いいえ」が２人となった。これより、中・高校生では票が割れる結果となったが、全般的にクラシック音楽への関心は今回の演奏を聴講することにより、高まったことが分かる。

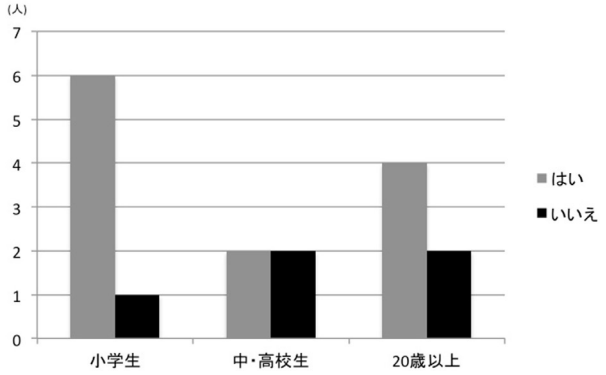

図４「今回の演奏を聴いて、今後 CD やコンサートでクラシック音楽を聴いてみたいと思いましたか？」への回答

質問事項４「今回の演奏を聴いてこれからピアノを演奏してみたいと思いましたか？」の結果としては図５の通り、小学生は「はい」が５人、「いいえ」が２人となった。中・高校生は「はい」が１人、「いいえ」が３人となった。20歳以上では「はい」が２人、「いいえ」が４人となった。よって、小学生では質問事項３、４の結果を踏まえるとクラシック音楽への関心が高まり、ピアノ演奏への関心も高まったといえる。その一方で、中学生以上の年齢層では逆転現象が生じており、クラシック音楽への関心が高まったとしてもピアノ演奏への関心の高まりにはつながらない結果となった。

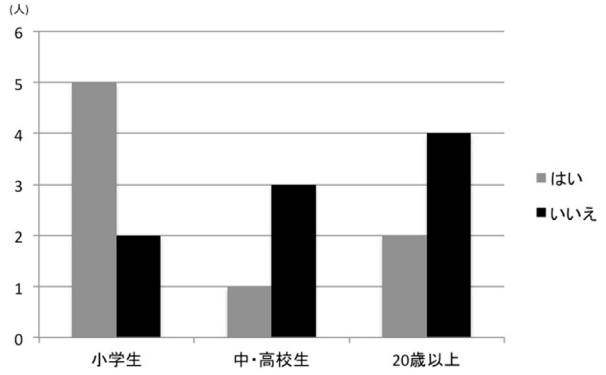

図５「今回の演奏を聴いてこれからピアノを演奏してみたいと思いましたか？」への回答

Ⅳ．考　　察

本研究の結果により、今回のホテルロビーにおける筆者の演奏によって聴衆のクラシック音楽への関心が高まったことが明らかとなった。このような結果をもたらした要因としては、演奏したクラシック楽曲自体が TV コマーシャル等にも用いられている等、一般的にメジャーなものであったため、そもそも聴き馴染みがあったということ。曲目に適度にポップソングを取り入れたため、クラシック音楽の素養に深い人でなくとも気軽に演奏に傾聴できたこと。ハウステンボスという観光・リゾートのためのスポットに訪れていた人を調査対象としたため、学校等で行うアウトリーチコンサートに比べて、義務感や緊張感がない状況で聴講できたことが推察される。しかしながら、クラシック音楽のみを演奏する場合と比較検討しなければ、厳密な判定は下せないと考えられるため、その点は今後の研究課題としたい。

また、ピアノ演奏の関心については小学生のような低年齢層ではクラシック音楽への高まりとともに、ピアノ演奏への関心も惹起できたと考えられる。その一方で、中学生以上の年齢層ではピアノ演奏への関心を高めることができなかった。この結果は、クラシック音楽への関心は低下していないが、演奏への直接的な関心は低迷しつつある現在の世相と一定のレベルで一致するものとなったと考えられる。よって、ピアノ演奏への誘いというものに関していえば、小学生のような低年齢層におけるアーティスティックな感動体験が重要なファクターとなることを改めて認識できるものとなった。その点を再認識できた点で、本研究は有意義であったと考えられる。しかしながら、本研究は母集団のサンプル数も大掛かりに多重比較検討を踏まえた有意差検定を行うには不十分であるため、あくまでも傾向に基づいた考察に留まらざるを得なかったため、継続研究課題の第一報と位置付けたい。今後は、同様の調査を継続して行い、有意差検定可能なサンプル数の獲得を目指していきたいと考える。さらに、今後の展望としては楽器店のキャンペーンの一環としての演奏時の調査等も追加して行っていき、性質の異なる聴衆を対象とした場合に得られる結果に基づいた考察を行い、さらに精度と信頼度の高い調査と研究を行うことを今後の研究課題とし、研鑽していきたいと考える。

【参考文献】

・原　尚志　山中　和佳子　木村次宏　2016年 『音楽アウトリーチ活動の実際と展望－福岡県宗像地区での実践を通して－』 福岡教育大学紀要　第65号　第６分冊　pp.1-8
・高萩　保治　中嶋　恒雄　2000年 『音楽の生涯学習－理論と実際』 玉川大学出版部